

結局は二つとも同じこと言ってるよなあという地点で作品を作りたい。演劇にはそれができるはず。

ここで言う「環境」も「場所」についてのことだ。そしてまた、「虚構(ウソ)」と「現実(ホント)」が重なりあう境界のことでもある。つまり、サンプルで培った方法やコンセプトをそのまま移植するのではなく、変態し、ハイブリッド化するのを面白がるということだ。「場所」と身体が五感を通じてどのように関わっているかが伝わればいいのだと思う。

サンプルのワークショップ「世界を着せ替える」においてもそれは共通している。これは、俳優、演出、舞台美術、音響、照明、宣伝美術、衣装、ドラマトウルク、制作が自らの方法を紹介しつつ、参加者と共に新しい空間、時間、身体感覚を発見しようとする試みである(ちなみに、このワークショップはサンプルのチーム力を高めるのに不可欠である。ここからのフィードバックが作品のクオリティに関わるから)。

筆者にとってはこれも演劇だ。何故なら、今まで無意識であった五感の感覚を鋭敏にする(メンテナンスする)ことは、結果として「現実」に対して錯覚を引き起こし、「虚構化」することともとれるからである。もちろん、そこには一種の危険も潜んでいる。洗脳とも取られかねないからだ。しかし、演劇に洗脳のリスクが全くないとは思えない。思い込む過程がないと「虚構」は成り立たないからだ。そして急いで付け加えると、とにかく、そこに「現実」側から「それ、ちょっと怪しいよ」というツッコミが入ることが重要なのである。境界にいるというのはそういうことだ。

### サンプルのこれから

ここまで読んでいただいておりますように、サンプルは劇場という「場所」にとどまらずに「これも演劇では?」と思いながら活動を進めている。どこか中途半端な部分もあるかも知れない。しかし、この方法の違いによって、演劇は現実も妄想も相対化させるツール(手段)であり、人々が集まる「場所」(目的)にもなることを伝えられたらと思っている。サンプルはそのための運動体である。

で、「虚構/現実スクール」を作りたいというのがこれからの野望である。そこでは、ウソとホントが程よく混じり合っている。偽善も偽悪もあり。でも、真・善・美には疑いの眼差しを向けざるを得ない。演劇はそういったものを扱いかねるし、こっちから願い下げるといふ思いで。



Photo: 岩村美佳

### 松井 周(まつい・しゅう)

1972年生、東京都出身。劇作家・演出家・俳優。1996年に平田オリザ率いる劇団「青年団」に俳優として入団。その後、作家・演出家としても活動を開始、2007年に劇団「サンプル」を旗揚げ、青年団から独立する。バラバラの、自分だけの地図を持って彷徨する人たちの彷徨を描きながら、現実と虚構、モノとヒト、男性と女性、俳優と観客、などあらゆる関係の境界線を疑い、踏み越え、混ぜ合わせることを試みている。作品が翻訳される機会も増え、『シフト』『カロリーの消費』はフランス語に、『地下室』はイタリア語に翻訳されている。近年では、文学座アトリエの会「未来を忘れる」(演出:上村聡史)脚本提供、新国立劇場「十九歳のジェイコブ」(演出:松本雄吉)脚本提供と同時に、俳優として映像・舞台上で活動。小説・エッセイなども発表している。

<http://samplenet.org/>

## 挑戦する演劇祭 佐藤佐吉演劇祭2014+開催とこれから

北川大輔  
Daisuke Kitagawa

### 演劇祭の概要

佐藤佐吉演劇祭は、2年に1回、「注目すべき作品・才能が集うときにのみ」開催される演劇祭で、今年が6回目の開催になる。過去の5回は、王子小劇場1会場で約2~3ヶ月・10団体程度で開催されたが、今回はその会場を5つに増やし、1ヶ月の短期で12団体が参加する演劇祭になった。私自身は、前回の演劇祭からスタッフとして参加している。この春から王子小劇場の芸術監督に就任したこともあって、今回は実行委員長として、演劇祭全体の進行を担当している。我々の佐藤佐吉演劇祭について皆様に簡単ではあるがご紹介できればと思って筆をとった。

### 演劇祭を始める経緯とこれまでの演劇祭について

演劇祭の話をする前に、演劇祭の運営主体について説明をしておきたい。佐藤佐吉演劇祭実行委員会の中核を担う王子小劇場は、1998年に北区王子に本社を構える佐藤電機株式会社が自社保有の土地に新しいビルを建てる際、社長の子息の意見が反映される形で地下に建てられた。用途変更を経て劇場になったのではなく、そもそも最初から劇場として使用されることを前提とした設計がなされていることから、都内の同程度の座席数を有する劇場の中でも使い勝手の良い劇場であることを自負している。また、昨年まで芸術監督だった玉山悟をはじめとする劇場の運営チームの尽力によって、東京の小劇場の、特に若い黎明期のカンパニーに対する積極的な支援を行ってきた。これまでポツドールや柿喰う客など、現在も小劇場のフィールドにおいて第一線で活躍する数多くの優秀なアーティストを輩出している。これらの功績が認められ、2008年に公益社団法人企業メセナ協議会主催のメセナアワード2008「たたかう劇場賞」を受賞した。佐藤佐吉演劇祭は、この王子小劇場を中心として実行委員会を組織し、運営にあたっている。

王子小劇場では1998年の開館から、夏に特集上演という企画を行っていた。これらの特集上演が2004年に発展する形で演劇祭が始まる。これは、当時の芸術監督である玉山悟の「劇場を貸し出すのは劇場の使命の半分。残りの半分は、『この劇場は今東京でこの演目が面白い』ということ世に対してうちだすこと」という考えに基づいている。なので、参加する団体は公募ではなく、すべてこちらからの招聘によるものとなっている。当初は全くの手探りで始めた演劇祭であったが、回数を重ねるごとに関連企画も充実してきた。全ての演目を有料で観た観客に対してチケット代の一部を還付する「10万円キャッシュバックキャンペーン」(06年から)や、各種スポンサー提供による賞の創設(08年から)など、より価値の高い演劇祭になるべく奮

闘している。

### 我々はどんな演劇祭を志向しているのか

ここまで、なるべく主観を交えずにこれまでの主な実績を羅列してきた。が、今年劇場の芸術監督の交代に象徴されるような大きな人事異動があり、実行委員会の顔ぶれががらっと変わった。このことで幸いにして「我々はどうのような演劇祭を志向しているのか」について考える機会を得た。

演劇祭の要は、勿論「どのような劇団を演劇祭にラインナップするか」にある。これに関しては、実行委員それぞれが、主に都内の劇場に直接足を運び、自信をもって推挙できる劇団を探してくる、ということに尽きる。今回に関して言えば、実行委員長の私のラインナップが約半分、あとの実行委員の推薦によって招聘した劇団が残りの半分、と言った具合になる。またその上で、出来る限りまだ評価の固まっていない若手劇団に積極的にアプローチすることを心がけた。それは、我々の演劇祭が、「アーティストのキャリアの中で最初に評価されるプラットフォームになる」ということを志向した結果だった。玉山は現在も実行委員としてこの団体の選定に関わっているのだが、彼が「既に誰かが評価している劇団を観ることを我慢してでも、我々は新しい劇団を観なくてはいけない。黎明期の劇団の100枚のチケットのうち、99枚関係者に捌かれたチケットの残りの1枚の当日券を王子小劇場の職員が買った」ということを言っていて、これは今回の演劇祭の、ひいては王子小劇場の基本姿勢になっている。

我々は、この姿勢には強烈な自負心を持っている。このようなアーティストは公共機関からの助成や援助はその公益性の観点から望みにくく、この時点でそういった評価の俎上に載ることが難しい。さらに現在、東京において若いアーティストが、「評価」の俎上に載るまでには、本来アーティストとして必要な能力以外の資質が必要とされる。もちろん自分を適切にプロデュース、マネジメントしてくれる制作者との出会いがあれば良いが、その出会いは運に頼らざるをえず、またそのような出会いは大変に稀である。そうすると、アーティスト自身でのマネジメントを必要とされるわけだが、本来であれば、この二つの能力は別々の人間で担われるべきものである。現在の東京の、特に小劇場のフィールドにおいては、この二つが備わっていないとまずアーティストとしての「評価をされる場所」まで辿り着くことが出来ない。我々が、アーティストが作品を発表しはじめた、彼らのキャリアの浅い

時期の支援を強化する理由は、ひとえにこの考えに基づくところが大きい。演劇祭という括りでより多くの観客にリーチするような情報の発信を可能にすることで、その一助となる事が出来るのではないかと、この思いからである。

劇団側の視点からでのみ演劇祭について書いてきたが、「演劇祭は誰のものか」を考えると、まず真っ先に向かい合うのが観客についてのことである。若い世代の上演は、若い世代の観客層の創出に大きく影響する。未来の豊かな舞台芸術のあり方について考えるとき、観客層の創造は必要不可欠だ。そういった若い観劇層に対して、我々は演劇祭で何を提供できるのかを思うとき、月並みだが「出会い」という言葉になる。演劇祭という括りでの複数の演目の上演によって、単なる「演目の提供」にとどまらない、多方向・双方向での出合い方が可能になると考える。他の演目にも興味を示したり、また複数の演目の比較、というところから今度は批評の分野への足がかりが生まれたりすることを期待している。そういった様々な出合いを、提供できる演劇祭にしたいと思っている。

### そして街全体を巻き込んでの演劇祭へ

これまで5回、2〜3ヶ月にわたって行われた演劇祭であるが、いずれも会場は王子小劇場一会場だった。多くの劇団を観ることが出来る代わりに、どうしても期間の長期化はいわゆる「祭り」的な盛り上がりや賑わいが生まれづらく、いずれの演劇祭の後でもこの賑わいの薄さに関しては問題になっていた。そこで今回、より祭り感を演出すべく、同時多発的に上演が行われ、観客が空いた時間で街を回遊するような演劇祭が出来ないものかについての調査が始まった。幸いにして会場を提供いただいた北とびあの北区文化振興財団、pit北/区域の東京バビロンにこの提案に快諾いただき、演劇祭は北区王子地区全体を巻き込んだものとして始まることになった。また同時に会場近辺の町内会、商店街の協力も頂くことが出来た。

とはいえ、これまで王子小劇場が地域に対して積極的になにか働きかけをするような劇場であったかといえば、実は必ずしもそうではない。貸し館の営業が主で、主催事業公演の製作が財政的に難しいという側面が大きい。これまで地域に対しての企画は、商店街とタイアップしての落語会や、北区に在住通学の生徒を対象としたワークショップ公演企画、北区に本拠地を置くプロレス団体と提携してのシアタープロレスなど、ごく限られたものであった。それでも今回この



演劇祭参加劇団〈犬と串〉舞台公演 Photo: 金丸 圭



同参加団体〈サムゴーギャットモンテイブ〉舞台公演



佐藤佐吉演劇祭2014+記者会見

ような協力を賜ることが出来たのは、これまでの劇場の15年の取り組みを評価していただいたものと思っている。王子小劇場は鑑賞に特化した劇場であることを自認している。自分たちで作品を創作することもなし、人材の育成にばかり注力することもかなわない。しかし、その中では確実に先鋭的な取り組みをこれまで数多く行ってきたと自負している。その上で今回の演劇祭でこうやって沢山の方々にご協力頂けたのは、我々のこれまでの取り組みによって、演劇に携わる層というごく限られた層に対してではあるが、王子が「劇場のある街」として認知されてきつつあることを、町の方々の側にも認めていただけたからではないかと思っている。

今回の演劇祭は、この「地域に対して開かれた演劇祭になる」と「良質なコンテンツの提供」の両方が両立する演劇祭になることを目標としている。先に書いた、「演劇に携わる人」だけでなく「王子地区で生活する人」に対しても「演劇の街、北区」の認知度が上昇する

ことを願っている。そこで我々が自分たちの目で選んだ優れたコンテンツに触れていただきたい。そのためにも街の中で演劇祭に触れることの出来る機会を増やし、また王子の外から訪れた観客が、王子地区を回遊するような仕掛けを用意できたらと考えている。

今回初めての同時多発開催で、まだまだ見えないところも多くあるが、きつと参加する側、観る側の双方にとって満足を得る演劇祭になることを確信している。本稿をお読みいただいた方にも、是非お越しいただければと思っている。



北川大輔 (きたがわ・だいすけ)

脚本家、演出家、俳優、プロデューサー。カムキヤッセン主宰。王子小劇場芸術監督。1985年生まれ、鹿児島県出身。東京大学教養学部地域文化研究学科中退。大学入学後演劇活動を開始し、都内の小劇場を中心に主に演出部や演出助手としての活動を続ける。2008年大学在学中にカムキヤッセンを旗揚げ。「現代の古典」を標榜する作品を発表し、これまですべての本公演の脚本・演出を手がける。2010年MITAKA Next Selection 11th.に、2013年シアターラムネクストジェネレーション vol.5に公募で、それぞれ選出される。2012年5月に王子小劇場プロジェクトディレクターに就任、2014年4月より現職。

今後の予定:

2014年6月25日(水)–7月21日(月)

「佐藤佐吉演劇祭2014+」(pit北/区域、王子スタジオ1、王子小劇場、北とびあカナリヤホール、北とびあスカイホール)

<http://www.en-geki.com/sakichisai2014/>

## viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第67号

2014年5月30日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: [foundation@saison.or.jp](mailto:foundation@saison.or.jp)

●次回発行予定: 2014年8月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。